

# 学会ニュース

## 目次

・ 第 29 回大会について	1
・ 電子文献データベース「ECCO」をめぐる問題 長尾伸一	2
・ 近代文献データベースの概要について 福田名津子	3
・ 事務局より	5

## 第 29 回大会について

第 29 回大会は、来る 6 月 16 日（土）、17 日（日）に、東京工芸大学・中野キャンパス（東京都中野区本町）で開かれます。開催校責任者は、平山敬二会員です。詳細は同封いたしました大会プログラムをご覧ください。6 名の会員が自由論題で発表され、また共通論題「『百科全書』の今日性」（仮題）（コーディネーター：逸見龍生会員）では 4 名の方がご報告くださいます。また、ルソーにまつわる映画上映（『J. J. ルソーの生涯と思想』の一部（1 時間 30 分））も予定されております。今年もまた大変多彩な内容の大会となっております。多数の皆様の参加をお待ちしています。

今年から学会期間中に小さなお子様をお持ちの会員の皆様がより参加しやすくなるように、会期中に会場近くの一時託児所をご希望の会員に斡旋する予定になっております。詳しくは大会プログラムをご参照下さい。

なお、共通論題コーディネーターの逸見龍生会員のエッセイは近く日本 18 世紀学会のホームページに掲載の予定です。ぜひご覧ください。

### 電子文献データベース「ECCO」をめぐる問題

長尾伸一（名古屋大学）

現在資料の電子化が内外のさまざまな分野で進んでいるが、その流れの中で、とくに英語圏を対象とする研究分野の将来にもかかわる大きな問題が生じてきた。それが以下に一橋大学図書館の専任助手を務める福田名津子会員に紹介していただく、ECCO および EBB0 と

呼ばれる近代ブリテンの出版物の全文検索・ダウンロードシステムである。詳しくは福田会員の文章にあるが、これらは近代英語圏の主要な文献を網羅した電子データベースであり、22万点におよぶ資料の横断的キーワード検索(AND検索等も可能)を可能にしている。そのうえ必要資料を自由にPDF形式でダウンロードして使うこともできる。

これだけであれば、英語圏を対象とする研究者には大変歓迎すべきことだといえよう。デジタル時代の世代が学会の中心になりつつある現在では、大幅な労力の節約や、創意工夫によって、研究の新しい時代が開かれる、と考えることもできる。いまや貴重書の調査のために大英図書館まで行く必要がなくなるばかりか、手元のPCでダウンロードして印刷した18世紀の資料に線を引いたり、切り取ったりしながら読むことができる。そのうえキーワード検索をうまく活用すれば、18世紀の言説や思想の全体像の把握などが瞬時に可能になる。自宅で思いついたアイデアを、いつでも机上のPCで検証できる。ポーコックたちの「言説史」の構想が、最新技術によってようやく現実化する時代を迎えた、とも言えよう。

だがここには大きな問題がある。本来営利企業の事業だったのではないにもかかわらず、日本の研究機関がこのデータベース作成にかかわっていないため、日本での利用には膨大な金額を必要とする。現状では一図書館あたりの買い取り価格が数千万円、それに加えて年間使用料が要求される。そのため大学からECCOやEEBOに自由にアクセスできるイギリスの研究者と日本の研究との間で、研究条件の格差がさらに拡大していくことになる。また日本の中でも、購入が可能なごく少数の大学、研究機関と、可能でない大多数の大学、機関およびそれらに所属する研究者の間で、大変な差が開くことになってしまう。これを放置すれば、本来日本の18世紀欧米研究者のような、資料上のハンディキャップを持った研究者にイギリスや合衆国とほぼ同一の条件を提供することができる最新技術が、まったく逆の効果をもたらすことになる。それは合衆国やイギリスでのデジタル世代の研究方法の発展によって、日本での研究を閉塞状態に追い込むだろう。

このような問題は、研究者全員に研究条件を保証するための公的な場でもある学会などで議論し、解決をはかっていくべきことだと考える。そこで会員のみなさんの関心を喚起するため、まず本号ではその概要を以下に紹介し、具体的にどのように研究で利用できるか、などについては、筆者の経験をもとに、稿を改めて説明したい。

## 近代文献データベースの概要について

福田名津子（一橋大学図書館）

現在、18世紀以前の英語文献を利用する研究者らのあいだで、個々の専門分野の垣根を越え、ふたつのデータベースが話題となっている。EEBO (Early English Books Online) とECCO (Eighteenth Century Collections Online) である。前者は紀伊国屋書店が、後者は雄松堂書店がそれぞれ取り扱っている。

EEBOは、1475-1700年のあいだに英語で、あるいはブリテンで出版された書籍類をデジタル化し、インターネットを通じてそのフル・テキストを提供するデータベースである。EEBOは、現在も継続してマイクロフィルム化されている3つのコレクションと補遺集がもとになっている。すなわち、①A.W. ポラードとG.R. レッドグレイヴによって編纂されたショートタイトル・カタログ(1475-1640年までの書籍を収録。以下STC Iと略記する)、その続編に位置づけられる②D.G. ウィングによるショートタイトル・カタログ(1641-1700年までを収録、STC II)、③STC I, IIの補遺集、④G. トマスンによるトラクト・コレクション(1640-1660年までのパンフレットや新聞、手稿類を収録)である。この4つを合わせた125,000点強のうち、EEBOには約100,000点(約23,000,000ページ)までが収録されており、デジタル化の作業は現在も進行中である。

EEBOの後続であるECCOは、1701-1800年にわたって、ブリテンおよび英語圏文献を収めたマイクロフィルム・コレクション“The Eighteenth Century”のユニット1-371(12,985リール)に収録された全資料のオンライン版フル・テキストを提供するデータベースである。収録数は、約150,000点(約33,000,000ページ)である。したがってEEBOとECCOを合わせると、15世紀末から18世紀にわたる英語文献およびブリテンでの出版物のほとんどが、オンラインで閲覧可能になる。両データベースは、文学、歴史、政治、哲学、言語学、神学、音楽、美術、教育、数学、科学、地理学などを網羅的にカバーしているため、専門分野を問わず広く研究者の関心を集めている。

ここで両データベースを構築するまでの歩みを詳細に追うことはしないが、古典資料のマイクロフィルム化を出発点とするならば、EEBOは1930年代に、ECCOは1970年代にそれぞれ始動したといえる。これらのプロジェクトは、TCP(Text Creation Partnership)に組み入れられることにより、第2期を迎えた。

TCPとは2000年にミシガン大学を中心に発足し、おもに人文社会系の大規模なデジタル・テキスト化を進めている非営利組織である。着手かつ進行中のプロジェクトは現在まで3つあり、EEBOは2001年に、ECCOは2005年に組み入れられた。これに加えて、2003年からのEvans(チャールズ・エヴァンズの『アメリカン・ビブリオグラフィー』に収録された1639-1800年までの書籍のデジタル化)がある。TCPではプロジェクトごとに出資、参画、協力するパートナーを募り、意見交換を重ねて同意を交わしつつ、計画を遂行する。プロジェクトの成果はその出資・協力者に還元され、完成したサービスの共同所有者となる。出資者以外は、その成果を購入しなければならない仕組みとなっている。技術に関してTCPは、保存用にSGMLを、出力用にXMLを使用しており、OCRとの違いを強調している。これによって、後述する全文検索が可能になった。

EEBOとECCOの使い方は類似しており、「検索Search」と「ブラウズBrowse」に分かれる。検索の仕方は、通常のデータベースと同じで、i)簡易検索かii)詳細検索を選んでキーワードを入力する。対するブラウズは索引のようなもので、EEBOだとi)著者別、ii)トマス・トラクツ、iii)定期刊行物に分かれており、著者はアルファベット順に、トラクツは巻号の順に、定期刊行物は年代順に並んでリンクが張られている。ECCOのブラウズには、i)著者別とii)作品別とがある。文献はその全文を閲覧することができ、PDF形式でダウンロードが可能である(ECCOはTIFF形式をとる場合もある)。

オンライン化により、マイクロフィルムと比べて格段に利便性が向上したことはいうまでもないが、PDF形式を採用したことで可能になった「全文検索」の意義は大きい。通常のPDF文書と同じく、EEBOとECCOに収録されている資料に対し、任意のキーワードで検索をかけることが可能になった。検索範囲は、パソコン画面で開いている1資料に限定することもできるし、全収録資料に広げることができる。検索に引っかかったキーワードにはハイライトがかかり、その含まれているページ全体が表示される。したがって文脈で用法を判断することができ、ある任意のキーワードでデータベースに収録された全資料内を横断し、用語法の変遷を追うことができる。電子テキストの利点が、研究の新たな可能性を提示しているといえよう。

全文検索で注意すべき点として、第1に、同機能はオンライン時のみ可能であり、ダウンロードしたPDFファイルに対しては無効である。第2に、検索の精度は完全とはいえない。これは、i)印刷が不鮮明である場合、ii)1単語が行やページをまたいでいる場合(ハイフンでつながれているので別の単語と見なされる)には検索が反応しないためである。また、「長形のs」は読み取り可能なようであるが、ギリシア語は読み取ることができないなど、若干の制限はあるものの、全文検索の持つ意義と可能性を大きく損なうものではないだろう。

## 事務局より

### 会費納入のお願い

学会ニュースと大会プログラムの発送とあわせて、新年度の会費（5千円）納入のための振り込み用紙を同封させていただきます。前回の学会ニュースでもお知らせ致しましたが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

幹事会メンバー：青木孝夫、安藤隆穂、安西信一（常任幹事・年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、木村三郎（常任幹事）、小穴晶子（常任幹事）、高橋博巳、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一、馬場朗（常任幹事・会計担当）、堀田誠三、増田真、森村敏己（常任幹事）  
会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本 18 世紀学会ニュース 第 54 号 2007 年 4 月発行  
発行者 日本 18 世紀学会 代表者 小田部 胤久  
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1  
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室  
e-mail: [voltaire18th@yahoo.co.jp](mailto:voltaire18th@yahoo.co.jp)  
fax: 03-5841-8958  
<http://www.soc.nii.ac.jp/jsecs/>